
喫茶店The miracle of a starlit skyにようこそ！

天空 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶店The miracle of a starlights
kyによるこそ！

【Nコード】

N0368Y

【作者名】

天空 翼

【あらすじ】

いきなり戦国BASARAの政宗似の従兄弟と喫茶店を行って
る戦国BASARAの幸村似の主人公、星季赤ほしきあかの前に現れたのは戦
国武将と忍達！？いきなり現れた彼らは行くところがなく赤はほっ
とけないと言って従兄弟の星季蒼ほしきあおに許可をもらって彼らを住まわす
ことに。普段の日常がちょっと非日常になった赤と蒼。近所の子供
相手にやってる星季道場の宝刀『贄殿遮那』を狙ってやって来る道
場破りやヤクザ、マフィアなどが襲ってきても彼らはのほほんと過

「^レしています。

今日も開業！喫茶店The miracle of a starlit skyによろこそ！

メニューー1 初めまして戦国武将さん！お出でなさいませ現代へ！（前書き）

長ッ！？何でこんなに長くなってしまった第一話！
これからよろしく願います。

メニュー1 初めまして戦国武将さん！お出でなさいませ現代へ！

俺の名前は星季赤。ほしきあか

幼きころ、俺は両親を失くした。

同じように両親を失くした星季蒼ほしきあお…アニキと共に俺は喫茶店を開いた。

【The miracle of a starlit sky）
星空の奇跡）】

それが俺達の喫茶店の名前だ。

この名前の意味はどんな困難にあったとしても星空のように輝き奇跡を起こす！そんな店という意味だ。

今日は喫茶店はお休み。

さてさて、ゴロゴロして「ドンガラガッシャーン！！」

「な、なんだなんだ！？」

何だかりビングのほうから何かが落ちる音がした。

きよ、今日は蒼のアニキ買出しでいねえし…どうしよう…。

強盗だったらある程度戦えるけど…ええい！迷ってる暇はないぞ星季赤！

俺は意を決してリビングへの扉を開けた。

「誰だあああああ！！…あ？」

「「な！？」」

「へ？」

「うそ！？」

「某！？」

「！？」

「ぬお！？」

「なんだと！？」

リビングにいたのは鎧や兜をつけ、刀などを持った男達だった。
そのうち2人は俺とアニキにそっくりな顔で…

つか、全員明らかに銃刀法違反だろうが。って…

「ちっがーう！！！！」

俺が叫んだことに全員がビクツとなる。

「そうじゃねえだろう俺！つかアンタら誰だよ！泥棒！？強盗！？」

「政宗様が盗人なわけがないだろう！」

茶色の人が言う。アニキ似の人は政宗っつーんだな。
ってちっがーう！！

「じゃあ何だっけ言うんだよ！それと何、人の家に土足で入ってん

だゴラア！」

誰が掃除すると思ってんだ！あ、アニキか。

「ほんつと何なんだお前ら！？」

「俺は奥州筆頭、伊達政宗だ！」

「……はい？」

今このアニキ似の青い人何て言った？奥州？伊達政宗？

「ありえねえだろ…奥州って昔の岩手県、青森県だろ？しかも伊達政宗ってもうちょい早く生まれてれば天下取れたって言う戦国武将の名前だろ？天然痘で右目失って独眼竜とか呼ばれて料理上手かつたって言うあの戦国武将だろう？馬鹿の俺でもこれだけは知ってるぜ…」

「天下が取れてた……？Hey、どうゆうことだ……！」

「ハア！？こつちもどうゆうことだ！だよ！いきなり現れて伊達政宗とか名乗りやがって！この政宗モドキ！だいたい、伊達政宗ですでにこの世にいない400年位前の人だろう！？死人侮辱すんな……！」

「400年前だとっ！？」

見ると全員が驚いた顔をしている。

「な、何だよ……？」

「おい、幸村似のboy。今は何時代だ？」

「ハア？何時代っつか…言うなら21世紀、平成。2011年の冬の初め？」

「へいせい？2011年？21せいき？」

全員が黙り込みその中で黄色の人が口を開いた。

「俺達どうやら、未来の世界に来ちゃった……？」

「な、何と！？そ、某はいつたいどうすれば！！うおおお！！お館様あああああ！！！！」

その非現実的なことに俺は驚いて声を上げた。

「ハア！？いきなし何言つてんの！？タイムスリップ！？馬鹿じゃねえの！？そんなの現代科学でもできねえって！」

「しかし、私達はここに実際に存在している。」

そう白い人が言う。

「そんなの……ああー！！頭こんがらがってきたあああー！！」

「俺様達をアンタが連れて来たわけじゃないらしいね。」

「連れて来るかあああああー！！誰が不審者なんて連れてくるんだよ！！ああ、アニキー！早く帰ってきてくれえええー！！」

俺はアニキに助けを求める。

「兄貴？お前は兄弟がいるのか？」

金色の人が聞いてくる。

「え？あ、うん。従兄弟と一緒に暮らしてんだ。」

「親は？」

今度は黄色の人だ。

「俺の小さなときに事故で死んじゃって、アニキも同じようにさ…。それから親の残したお金で何とか暮らしてるんだ…。顔も覚えてないけどなあ！」

笑いながら言う。

あれ？

「って、ちっがーう！！なんか違ーう！！何で俺、名前も名乗ってない人と普通に話してんの！？」

「おつ、そーいやそうだな。俺は前田慶次！流離の風来坊ってな！」

何か名乗りだしたぞ…

「俺様は佐助だよ！こっちのだんまりしてるのは風魔。俺様達は忍だよ。」

え？マジ！？

「忍者！？マジ！？うそ！？分身の術とかできるの！？」

「できるよ」

「うわっすっげえ！！」

俺はすぐに警戒心がなくなった。

「某は真田源次郎幸村でござる！」

俺に似た人がそう言った。

「ワシは徳川家康だ！」

「私は石田三成。」

「俺は片倉小十郎だ。」

「OK、覚えた。」

俺がそう言つと全員が目を丸くする。

「お前、南蛮語が話せるのか！？」

「な、南蛮？ああ、英語のことか。今じゃ世界共通の言葉だぜ？」

俺が説明する。

「俺達の知ってる世界とはやっぱりかなり違うんだな…」

政宗がそう言った。

俺はもう、疑わない。この人達は過去から来た。それでもういいだろう。

考えるのはもう面倒だ。

「あ、俺は星季赤！赤って呼んでくれ！」

「赤殿はこれから某らをどうするのでござるか？」

ほんと幸村って俺に似てるよね。顔だけ！

「俺は行くところがない人を見捨てるほど非情じゃない！」

俺はそう豪語した。

「アニキも同じだよ。というか、優しすぎて逆に危なっかしいくらいだ。」

俺は苦笑しながらそう言った。

本当、あの馬鹿アニキは…

「で、貴様の兄貴とはどこにいるんだ？」

三成が聞いてくる。

「ええっと…もうすぐ帰ってくると思うんだけど…」
「たっだいまー！ー」
「あ、帰ってきた！って、あゝ隠れて隠れて！」

「何で？」

「いやいや、さすがにいきなりはアニキ驚くから！だから呼んだら出てきて！」

「おい、ちょっと荷物の出し入れ手伝ってくれて…赤？」

アニキがリビングに入ってきたやがたあああああああああ
！！！！！！

アニキはドアノブに手をかけながら固まってしまった。

「「「んなあ！？」「」」

全員が声を上げる。

アニキは政宗にそっくりだもんね…ってそうじゃなくて！！

「……」

「あ、アニキ…これにはじ、事情が…」

「赤…兄ちゃんは確かにいつまでたっても彼女ができないお前のことを心配してはいたが…」

何か語り始めたよ！

「ホモの道に入ってしまうとは予想外だった…」

「誤解だアニキiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

ものすっごい誤解だアニキ！

俺にそんな趣味はない！！

「いや、別にそれがお前の趣味だってんなら俺は止めやしない。軽蔑もしないし全力で応援させてもらうからね！」

「誤解だアニキ！弁解させてくれ！！」

「恥ずかしがるな。俺はお前がどんな道に入ってたって応援してるからな！」

「違う違うちつがーう！！アニキ、弁解の余地を！」

「俺はお邪魔らしいな。頑張れよ（＾　＾）b」

「アニキイイイイイイ！！！！！！」

アニキは盛大に勘違いをしてしまったようだ。
こうなったアニキは元に戻すのに時間がかかる！

俺は全力でアニキに弁解をして理解してもらった。

「あー、なるほど。それでタイムスリップしてきたってわけか」

「ゼエハアゼエハア…よかった！アニキの中で道を踏み外した人間の仲間入りせずによかった！」

俺はテーブルに突っ伏しそう言った。

「ゴメンゴメン、ちょっと慌てちゃったわ！」

「ちょっとじゃねえよ！俺は危うくアニキの中で道を踏み外した人間の仲間入りという認識を受けそうになったんだけど！？」

「それはわりいって言ってるじゃんか。」

「わりいじゃねえわああああ！！俺からしたら大・問・題だッ！！」

「じゃあ家に住むってことで決定だな！」

「え？いいのかよアニキ？」

俺はすつとんきよな声を上げた。
まあわかってたけどさ…

「ああ！家族が増えるのは嬉しいし、何より困ってる人を見捨てるほど俺は非情じゃない！」

「兄弟で同じこと言ってるな…」

小十郎さんがそう言った。

「俺は星季蒼だ。よろしくな。」

俺が挨拶をし互いに自己紹介を終えた。

「幸い、家は和風の家だし。広いし。こんくらいの人に住むのはチヨロイチヨロイ！生活費もあまり余ってるしな。さて、俺は夕飯…夕餉を作ってくるから赤は全員を風呂場に放り込んでけよ♪」

「放り込むって何！？せめて入れるって言えよアニキ！」

俺は盛大に突っ込んだ。マジで何なんだよアニキの口の悪さは……元不良ってのが関係してる？

「「「ふろ？」」」

全員の声がハモった。

「って、風呂場知らないのかよ！？」

「呼び方が違うんだ。湯殿だっけ？」

「ああ、湯殿か。」

全員が納得したような顔をする。

「さっすがアニキだな。でも、食材どうすんだ？こいつらもいるし……」

「ん？一般家庭で大人気で大阪本場のアレを作ります。」

「だからアレってなに！？」

「今のヒントでわかんないってある意味、才能だな。」

「馬鹿にしてるよな！？完璧に馬鹿にしてるよな！？」

「まあ、お前もついでに風呂入って来いよ。明後日はまた店だぜ？」

「わあつたよ。」

俺はそう返事をする全員を連れて行く。

風呂場

家の中にある大浴場。そこに俺は全員を連れてきた。

「で、でけえな…」

普通の風呂場よりかは遙かにでかいだろうな。

俺達の家はもともとでけえ剣道場だ。いや、今もただけどな。

門下生は近所の子供だけで、喫茶店が休みのときは大抵アニキと一緒に先生をやってる。

道場破りもいたりしたけど大抵、アニキが吹っ飛ばすんだよなあ……
その姿に憧れてやってくる近所の子供もいるし…万事OK？
まあ、それを全員に説明しとかなきゃな。

「俺も入るから実践で教えるぜ。あ、この家について教えとくよ。
1週間の1度はこの家の道場に近所の子供達がやって来る。」

「何故でござるか？」

「遊びにでも来るのか？」

幸村と家康がそう聞く。

「遊びに来るわけじゃないよ。俺とアニキは2人で喫茶店…茶屋を
やっててさ。店が休みときは大抵、剣道場の先生…師匠やってん
だ。近所の子供達が門下生で、1週間の1度、剣を教わりにやって
くるってわけ。わかった？」

「何と茶屋をやっておられたのか！」

「なるほどな。茶屋をやってる合間に剣を教えているのか。」

小十郎さんと幸村、他の人も納得した様子を見せる。

「わかってくれた用で何よりだ。あ、ちょっと待っていてくれよ。今
すぐ着替え持ってくるから。」

確か着流しがいくつもあったよな。

その後、俺はシャンプーなどの仕方を教えて全員で湯に浸かった。

いやあ、シャワーのお湯を出したときの武将達の驚きようといっただけじゃないぜ〜！

三成は家康と一緒にギヤーギヤー言っただけ、風魔は忍が背中を簡単に見せることはできないとかいって天井にへばりついちゃったけど駆けつけたアニキが黒いオーラを出すと速攻で黙って速攻で降りてきた。

アニキつええ…

禪ではなくちゃんとした下着を履いた。皆着流し。あ、政宗が青で幸村が赤。小十郎さんが茶色で佐助さんが緑。慶次と家康が黄色。三成が白、風魔が黒だ。俺は紅。

…その後…

「でけたよー！」

「アニキ、ボケんのもいい加減にしてくれ！そこはできたよだ！」

「チツ…」

アニキが鉄板プレートを引っ張り出してきた。

狭いほうの風呂に入ったらしく藍色の着流しを着ていた。

横にはボール3つほどの好み焼きのタネ…

「何でこんなに多いのさ!？」

「お客がいっぱいいるから！」

サラリと爽やかに答えるアニキに殺意を若干覚えたのは気のせいだ

ろっ。

「さて、作るかー。」

アニキが手に卵を持ちタネと混ぜようとすると佐助さんが待ったをかけた。

「ね、ねえそれって…卵…？」

「は？そんなの見りゃわかるだろ？」

俺が言うと全員が騒ぎ出した。

「貴様ら正気か！？」

「卵などと高級なものを！」

「贅沢だよ君達！」

「考え直せ！yousee!？」

上から三成、幸村、佐助、政宗だ。

「は？贅沢？」

「お前達は金銭感覚が麻痺しているのか！？」

俺が贅沢って何が？的な顔をして言うと家康が叫んだ。

「…」

アニキは何か考えているそぶりを見せ、あ！と声を上げた。

「そっか。大丈夫。卵は現在じゃ庶民の味方だよ。」

「え！？そうなの！？」

「ど、どういうことだよアニキ？」

俺はアニキの言ってることがわからない。
馬鹿だから。

「昔は卵は高級品だったんだ。だから驚いてたんだよ。」

「ハア！？卵が高級品！？マジで！？」

「大マジだ。」

「う、嘘…」

あの卵が高級品って…
自分がどれだけ贅沢かがわかった。

「赤？」

「アニキ…俺、どれだけ自分が贅沢かわかった…」

テーブルに突っ伏す俺。

「お、おいおい…」

俺は呆れたような様子を見せるアニキはコテでネタを引つ繰り返していた。

「「「おおー！」「」」

戦国武将達は目を見開き驚いている。
たった数時間でこれだけ仲良くなれるなんてな

「主人を守りたいのはわかるけどそんなに構えちゃ身が持たないよ
佐助さん？」

アニキがふいに言う。

「っ！へえ、気づいてたんだ」

「人の分陰気を読むのは得意だからな。」

笑いながら言うアニキ。

「さて、食っちゃえ食っちゃえ！まだまだあるからなー！」

アニキが皿にお好み焼きを盛り付けソースとマヨネーズ、青のりをかけた。

「相変わらずアニキの料理は美味そうだな！いったただっきまーっす
！」

俺は手を合わせてそう言って食べ始めた。
んー！美味しい！

「ふはいへあひひ〜！（美味いぜアニキ〜！）」

ん？武將が俺のほうを見てる。

何だ？お好み焼きなら自分のをさつさと食べよ。

「Hey 赤！そのいただきますってのは何だ？」

「ふえ？」

「いただきます、ごちそうさまの習慣はまだ戦国時代にはないんだ。」

アニキが説明を入れる。

「あーなるほど…！いただきますってのは、命をいただきますって意味なんだ！」

「「命を？」」

家康と三成が復唱する。

「うん！魚も野菜もみーんな元は生きてた！その命をいただくからいただきますって言うんだ！」

「まっこと良い習慣でござるー！」

幸村がそう言う。

「そうだな。」

小十郎さんもそう言った。

「で！食事が終わった後はごちそうさまって言うんだ！わかった？」

「コクリ」

風魔がうなずく。

そして全員が…

「「「いただきます！」」」

と言って食べ始めた。

食べ終わって、さて、寝ますか！

てわけで部屋わけだー！

「部屋わけはこのあみだくじで決めっから！拒否したやつは…」

アニキの低い声に全員が体をこわばらせる。

「罰ゲームだよ」

「ギヤアアアアアッス！！！」

俺は頭を抱えた。

前に俺はアニキの罰ゲームを受けたことがある。

あんときは恐怖と絶望のあまり精神を回復1ヶ月かかるまでスタズ
タにされたっけ…

「Hey どうしたんだ赤!？」

「い、いや… アニキの罰ゲームを受けたときのことを思い出して…
(ガクブルガクブル)」

このとき、武将全員の顔がどんな罰なんだ!？と青ざめたのは言うまでもない。

「じゃあ、それぞれここに名前書いてー。」

全員にペンを渡したアニキは名前を書かせる。
皆、ワイワイ名前を書いていく。

そして決まったのが…

『政宗 & 幸村』

『片倉 & 佐助』

『三成 & 家康』

『慶次 & 風魔』

俺とアニキは元から一緒の部屋で寝ているから論外。
けど、障子開けたら政宗 & 幸村ペアがいるんだよね

「な、何故私が家康と共に眠らなければならないのだ!！」

「何で俺様は旦那と一緒にじゃないわけ!？それどころか竜の旦那と
真田の旦那が一緒だなんて!」

「拒否した者は罰げむを受けるのでござるよ佐助!？」

「三成、今からでも訂正したほうがいいと思うぞ！」

三成と佐助さんが文句を言い幸村と家康が止める。
しかし時すでに遅し。

アニキは忍者もビックリの速さで2人を逃げられないように掴むと……

「
バ
ッ
ツ
ゲ
ー
ム
♪
」

と言つてまたもや忍者もビックリの速さで2人をどこかへと連れて行つた。

「うわああああ……あの2人がアニキの罰ゲームの餌食にいいいいい！！」

俺が頭を抱えた瞬間：

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアア！！！！！！！！」

ものすごい絶叫が聞こえた。

「さ、佐助！？」

「み、三成！？」

「…知ーらねつと！」

俺は全員を部屋に案内する。

途中、皆が大丈夫なのか！？と聞いてきたが俺は

「戦国武將に忍者なんだろう？なら、きつと大丈夫。あのまさに地獄とも呼べる出来事も切り抜けられるさ！」

と言っておいた。

全員から地獄って何！？とか言うツツコミをいただきましたが。

メニュー 1 初めまして戦国武将さん！お出でなさいませ現代へ！（後書き）

次回は面白い物と子供達が道場に来る！

メニュー2 買い物に行きまSHOW！子供達と会いまSHOW！道場破りと

「買い物に行くぞー！」

翌日アニキが叫んだ。

そーいや、全員着流したもんな。

あ、武器の携帯は全員にするな！と言っておいた。（つーかアニキが脅した。）

「って、今日は道場の日だろうが！」

「大丈夫。2時からだろう？今から行けば道場の時間には間に合うさ。」

アニキがそう言う。

「でも、この人達全員を連れて「誰が連れてくって？」へ？」

俺はアニキの答えに？を浮かべる。

「ガタイの言いやつだけ連れてくのゝそーすりゃ時間短縮できるだろ？つーわけで…佐助さんと政宗と幸村と慶次！付いて来い！」

「外に出られるのでござるか！？」

「騒がないんだったらな〜」

「俺はAll right！」

「俺もだ！」

絶対、わかってねえだろ！

「俺様も大丈夫だけど旦那がね」

佐助さんは心配そうに幸村さんを見ている。

「だから佐助さんを連れてくんだよ。」

「へ？」

佐助さんは呆氣にとられている。

「オカンヒーロー・サスケーンを連れてけば幸村の暴走は抑えられるからな！」

胸を張って言うアニキ。

「オカンヒーロー・サスケーンって何！？何でヒーローになってんの！？」

「いや、幸村を守る忍なら幸村のヒーロー…正義の味方だろ？」

佐助さんが驚いた顔をする。

「いや、武田にとって幸村にとっての正義の味方かな？」

「……」

佐助さんが黙った。
戸惑ってるのか？

「ああ、幸村。」

「何でござろうか？」

「騒いだら…罰ゲー」「絶対に騒がないでござる！！」よかった。」

アニキが罰ゲームと言いかけるとすかさず幸村は誓った。
アニキ絶対黒属性だな。

「じゃあ、いくぞ！赤も付いて来い！」

つて、俺も！？

「る、留守番は…」

「小十郎さんに任せとけば大丈夫だってーの！てわけでよろしくな
小十郎さん！」

「わかった。」

アニキは俺達をデパートに連れて行く。

ああ、皆は着流しのまま。俺とアニキは私服だ。

アニキの服装は青のV字型長袖Tシャツにジーパン、運動靴に銀の
星のネックレスといった格好だ。

対して俺は黒い普通の半袖Tシャツの上に赤いパーカー。膝までし
かない普通の白い半ズボンに運動靴。

俺よりアニキのほうが大人っぽくてカッコいい。

ちよっと……羨ましいな。

俺はアニキを少し嫉妬の目で見やる。

そんな視線に戦国武将たちが気づいた。

「どうしたの赤君？ 蒼君のことジロジロ見て。」

佐助さんが言う。

アニキは気づいてない。

「俺ってさ…アニキより子供っぽいなって思ったんだ。」

「どういふことでござるか？」

「服装だってアニキの方が大人っぽいしカッコいい。頭だってアニキは良いし、馬鹿な俺とは大違い。昨日だってそうだった。俺よりアニキのほうがいろいろ詳しいかった。」

昔っからアニキと俺の違いはコンプレックスだった。

「血は繋がってるのにどうしてこんなに俺とアニキは違うんだって。アニキと比べられるのが嫌だった。」

「赤、それは違うと思うよ。」

慶次が言う。

「蒼は蒼。赤は赤だろ？ 血は繋がっても違う人間だというのには変

わりないし、それに蒼は赤を大切に思っている。俺はそう思うよ。
だからいろいろ頑張ったかもしれないよ。」

お前を守るために

慶次の言葉で俺はアニキを見やった。

「…ハハッ、そうかもな。アニキはいつも頑張ってた。俺も今からなら追いつけるかもしれないな。」

俺はそう言つとアニキに後ろから抱きついた。

「アツニキー！」

「うおわぁ！？どーしたんだよ赤？」

「へへっ、何でもねえーよ！」

俺は手を後ろで組んでそう言った。

「…あの兄弟は仲が良いでござるな。」

「ああ。これでもかってほどにな。」

「何か羨ましいね」

「俺にも兄弟がいたらあんな感じだったのかな？」

「あ、ここがデパートだ！皆、洋服売り場に行くぞー！」

アニキが後ろの武将達に向かって叫ぶ。

「」「」おっ！」「」

全員が元気よく返事をした。

デパート

「ぬおお！？扉が勝手に開いたでござる！？」

「騒いだら」「も、申し訳ない…！」許す。」

自動ドアに驚く幸村に騒ぐ武将達。

アニキがニッコリと天使のような（本当は魔王）の笑みを浮かべ言

いかけると全員が黙った。

「これは自動ドア。人に反応して文字通り自動で開く扉だ。で、これがエスカレーター。自動的に動く階段。」

「す、凄いでござる!」

「未来ってのは何でもアリか?」

幸村は目を輝かせ政宗は何でもアリの世界に呆れていた。

「何でもアリなんですアンタから見たら!」

アニキはそう宣言する。

「あ、慣れてきたら店の手伝いとか家事とかもしてもらっからな! アンタらその前に帰ればいいな。俺人使い荒いから。」

人使いが荒いですよ宣言しやがったよこのアニキ。

「さあ!まずは洋服からだぜ野郎共!!」

「アニキ、テンションMAXになって不良モード発動とかよしてくれよ。」

「鬼の旦那が目の前にいる...」

佐助さんがなんか言ってる。

鬼の旦那?誰さそれ。

「じゃあ逝くぜ野郎共！」

「ねえ蒼君。行くが逝くになつてた気がするけど……」

「気のせいってことにしたほうがいいぜ佐助さん。身がもたねえ。」

俺が佐助さんと言うと佐助さんがジッと見ている。
他の武将達もだ。

「…ねえ赤君。佐助さんつての止めてくれないかな？旦那と同じ顔だからなんか落ち着かないや」

「それさりげなく幸村を馬鹿にしてませんか？」

「おい。」

俺達はアニキの方に顔を向ける。

そこにはたくさんさんの洋服に埋もれたアニキが…

「ア、ア、ア、ア、アニキイイイイイ！?!?!?」

「ふっ、似合いそうな服を選んでいたらこんな風になった。」

「いったい何着あんだよ!?!」

「聞くか？」

「イヤ、イイデス…」

とんでもない数になりそうだから止めた。

「…ねえ、こんなに買ってお金大丈夫？」

佐助さんが言う。

「そうだぜ蒼！こんなに上等な着物！」

政宗が言う。

「ああ、大丈夫だぜ。」

サラリと言うアニキ。

「赤には言ってなかったけど俺、ブラックカード20枚は持つてるから。」

え？今何と言いましたこのアニキ？

「「「ぶらつくかーど？」「」「」

「ハアアアア！?!?」

「冗談だよ。」

俺が絶叫するとアニキはそう言うけどそれって嘘だな。
しっかしブラックカード20枚ってアニキ何してんだよ本当。

「さあ！政宗にはこれとこれとこれ！幸村には…」

次々と服を渡してくアニキ。

顔が生き生きしてるよ…

「なあアニキ。顔がむちゃくちゃ生き生きしてるんだけど…」

「何のことでしょうか？」

ヤベエよ店員モードに入ったよ…

こうして全員が着替えた。

マジですげえ大变身だ。全員が全員今時のいいや、それ以上の男前になっている。

服装？勝手にご想像くださいな。

留守番組の服も買って、アニキは営業用とか言う服も買った。

それだけでむちゃくちゃすげえことになった。

大きな袋が8…

マジかよ…

皆で持って何とか帰れた。

そして全員が着替え2時になった。

「道場の時間だな。」

アニキは髪を青いゴムを使い後ろで結わき耳の後ろに残りの髪を掻き揚げピンで留めていた。

白い胴着に黒い袴。竹刀の入った長い紺の袋を担いでいた。

そんな姿を全員が驚いた顔で見ていた。

「ん？」

（HA！驚いたぜ。瞳が俺達と同じだ…）

（な、何と凛々しい出で立ち…！）

（平和な未来に生きる子のはずなのにね…）

そう。アニキは武将達と同じ戦人の瞳をしていたんだ。
必ず竹刀を持つところなるアニキ。

俺は正直ギャップがすごいと思っている。

「じゃあ行くぜ！」

アニキは道場に向かう。

皆も見学するために向かっていく。

俺もアニキと同じように胴着に袴を着用し道場に向かった。

「よつす皆！こんにちわ！」

「『こんにちわ蒼先生！』『』『』」

俺たちと同じ胴着と袴着用的小学生1年から6年くらいの子供達が
並んで挨拶する。

アニキの指導の手伝いが俺の仕事だ。

「センサー、あのおにいちゃんたちはー？」

「先生が2人いる！？」

「赤先生も2人いるー！」

「え、ええつと、彼らは先生達の遠い親戚なんだ。しばらく家に住むことになったんだ。」

「くくへえー。」「くく」

「さあ皆！準備運動をした後は素振り100回×10だ！」

「くくはいつ！」「くく」

全員が準備運動し始める。

何故アニキが普通に100回と言わなかったのかは訳がある。感覚だ。普通100回やるとなれば気が遠くなるもの。

しかし10回と言われれば？普通にやり短いそれを10回やればいい。数は変わらないがようは感覚の問題だ。

これなら子供も苦痛じゃない。

そして…

「泉ちゃん！踏み込みが甘い！」

「はい！」

「優輝は脇をもつと閉める！」

「はい！」

アニキは1人1人に注意していく。

「上手いもんだな」

慶次がそう感心しながら見てる。

「俺の軍に欲しいな……」

「あげないからな！」

政宗の言葉に俺はそう言った。
そんなとき……

「たのも……！！！！」

大声が響き道場の門が開かれる。

「！？」

風魔が構える。

いや、全員がすぐに構えを取った。

「やれやれ……」

アニキは頭に手をやってハアとため息をついた。

「何者でござるか！？」

幸村がすぐに吼えた。

「道場破りだ……」

俺は呟いた。

武將全員の視線が俺に集中する。

「道場破りだと？」

三成が俺に聞いてくる。

「ああ。この星季道場は爺さんが近所の子供を集めてやり始めたのが最初でさ。爺さんの大切にしていた刀。今じゃ宝刀として俺達は保管している。その刀の名はにえとののしやな贄殿遮那。」

「にえとのの贄殿……」

「しやな遮那……」

小十郎さんと家康が続けて言う。

「そう。その刀は資格あるものが持つと不思議な力……たしか虹色の婆娑羅とか呼ばれる力だっけ？を所有者に与える。摩訶不思議な刀なんだ。」

「……婆娑羅だって！？」「……」

武將達が驚いた顔で叫んだ。

「ああ。おとぎ話みたいだろ？俺達は信じてないんだけどさ。それを信用してる連中が刀目当てに道場破りに来るんだよ。」

まったく……本当に

「虹色の婆娑羅なんて馬鹿げてる…。婆娑羅なんて力、存在するわけがないのにな！」

俺は笑いながら言う。

そのとき俺は気づかなかった。武将達全員の顔が困惑に満ちてるところに…

「皆、下がってろ。」

「お前が星季蒼か！丁度良い！俺と勝負しろ！俺が勝ったら宝刀・贄殿遮那をもらう！」

「……わかりました。」

あ、アニキが敬語。

ありゃ絶対、怒ってるな。

アニキがあーゆう輩相手に敬語になるときは怒っている証拠。

アニキは少し歩を進めると竹刀ではなく木刀に持ち替えて構えた。

「さあ、始めよう。」

道場破りも木刀を持ってアニキと対峙した。

メニュー2 買い物に行きまSHOW!子供達と会いまSHOW!道場破りと戦

次回は道場破りとの戦いと武将達の密会です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0368y/>

喫茶店The miracle of a starlit skyによろこそ！

2011年10月30日18時14分発行